

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 10 日現在

機関番号：34504

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2012～2013

課題番号：24830115

研究課題名(和文) コミュニティにおける地元出身者と移住者の交流に関する異文化間心理学的アプローチ

研究課題名(英文) Psychological investigation of intercultural communication between domestic emigrants and local residents

研究代表者

前村 奈央佳 (MAEMURA, Naoka)

関西学院大学・社会学部・准教授

研究者番号：50632238

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円、(間接経費) 630,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、人が移住をするに至る心理的なプロセスを解明すべく、日本本島から沖縄県への移住者にインタビュー調査・アンケート調査を実施した。移住者に対する調査の結果、移住の動機には「ビジネス・勉強型」(仕事や進学のため)、「同伴型」(移住する家族と一緒に)、「逃避型」(ネガティブな出来事から逃れるため)、「療養・セカンドライフ型」(病気の療養などのため)の4パターンが主に見いだされた。このパターンと沖縄への適応状態の関連について分析した結果、「ビジネス・勉強型」のような具体的な目的を持って移住をした人はむしろ、移住後しばらくして深刻な不適応状態を経験する傾向があることなどが明らかにされた。

研究成果の概要(英文)： Recently, Okinawa (Ryukyus), the southernmost prefecture of Japan, has become one of the country's most popular transmigration and tourist sites. This study investigates the motivations of Japanese emigrants to Okinawa and the relationship between their motivations and their adjustment to Okinawa. Participants were 26 interviewees and 412 online questionnaire respondents.

Based on the results of the surveys and interviews, participants' motivations for moving were categorized into four main groups: a) migration for business or study, b) migration to accompany someone else, c) migration to escape, and d) migration after retirement. These patterns are plotted on two axes, wherein migration is either voluntary or involuntary and the purpose of migration is either concrete or abstract. The results also suggested that emigrants with concrete objectives tend to experience poorer adjustment after immigration to Okinawa than those who moved for abstract reasons.

研究分野：社会心理学

科研費の分科・細目：社会心理学

キーワード：移住動機 異文化適応 移民

1. 研究開始当初の背景

移動や移住に伴う心的なプロセスに関する研究は、主に異文化間心理学の分野において、移民や留学生、海外勤務者などの「文化移動者(cultural traveler)」を対象として蓄積されてきた(Berry, 1989, 2001など)。ここで扱われる「移動」の多くは国際移動・移住を指しているが、現実には、国境を越えない国内移動・移住が圧倒的に多い。世界的にみても、国内移住の件数は国際移住の4倍以上であるとされる(人間開発報告書, 2009)。国内のコミュニティ間の移動は、国際的な移動に比べて、一般的かつ日常的な現象であると言えるだろう。

わが国においては近年、沖縄県への国内移住が注目を集めている。沖縄県は美しい海、一年を通して温暖な気候、のんびりした人々などのイメージを強みに、観光地としてだけでなく移住先としても人気が高い。国内移住は、移動の容易さ・言語の障壁が少なさなど、物理的なコストが比較的低いと考えられる。だが、新しい環境で人間関係をうまく築けないことや、生活パターンの変化への戸惑いなど、国内のコミュニティ移動に伴う心理的コストは僅少ではないことは明らかである。たとえば昨今の「スローライフ」ブームにより、都市部から理想郷のようなイメージを持って沖縄へ移住した人々が、来沖後に数々の困難を経験し、結局は短期間で沖縄を去っていくというケースも散見される。

また、移住者の移動先の地域には、「地元出身者」が少なからず存在する。ある土地に長く住む個人にとって、その土地やコミュニティへの帰属意識は、社会的アイデンティティを形作る主要な要素となる。地元出身者の幸福感にとって、移住者という「異文化」を内包したコミュニティが良好な形で継続していくことは重要であると考えられる。地域コミュニティとしても、異文化をうまく受け入れ発展していくことは、少子高齢化が加速する現状において喫緊の課題であろう。

このように、国内移動に伴う移住者・地元出身者の異文化間接触やそこで生じる葛藤について検討することは、理論的にも応用的にも重要である。にもかかわらず、心理学的な観点からこのテーマに挑んだ研究は少ない。また、沖縄というフィールドに着目してみても、「沖縄から」本土や海外への移住や移民の研究は複数あるものの、「沖縄へ」の移住については心理学的な研究知見が殆ど見当たらない。

2. 研究の目的

本研究は、日本国内における地域コミュニティ間での人の移動に着目し、移住者・地元出身者の両立場の異文化適応と、円滑な関係性の構築を目指すものである。研究のフィールドは沖縄県(沖縄本島)とし、日本国内から沖縄県への移住を中心に扱うこととする。沖縄県は、その歴史的な背景から特殊な文化

や慣習が多く存在するため、国内における異文化間接触の好例であると言える。また、はっきり公表された数値は存在しないが、マスメディアの影響もあり、沖縄県への移住は国内で人気が高まっており、国内移動・移住のフィールドとしては最適であると考えられる。

ここで主に明らかにしたいことは、(1)移住者の移住動機パターンの解明、(2)移住者の移住動機パターンと適応レベルとの関係性の検討、(3)地元出身者の心理的特性が移住者受け入れ態度に及ぼす影響の検討である。このうち、研究期間内は特に(1)(2)の移住者に対する検討を中心に行った。

(1) 移住者の移住動機パターンの解明

国内移住に関しては研究が少ないため、そもそもどのような理由から移住するのかという実態的な側面も把握できていない。そこで、まずは移住者に綿密な聞き取りを行うことによって、沖縄への移住動機を精査し、そのパターンを質的に導き出し、類型化を試みる。

(2) 移住者の移住動機パターンと適応レベルとの関係性の検討

ここでは、(1)で見いだされた沖縄への移住動機のパターンを数量的な調査によって確かめる。その上で、移住動機のパターンと、異文化適応レベルとの関連性を検討する。

(3) 地元出身者の心理的特性が移住者受け入れ態度に及ぼす影響

沖縄県出身者の、県外からの移住者や観光客など「ないちゃー(方言で「内地の人」)」に対する態度(異文化受け入れ態度)を測定する。また、共感力などの個人特性を測定し、異文化受け入れ態度への影響を検討する。

3. 研究の方法

(1) 沖縄移住者の移住動機に関する探索的研究

① 調査の主目的

沖縄移住者に対して綿密な聞き取りを行うことにより、沖縄への移住にいたった動機に関するエピソードを収集し、類型化する。

② 調査方法

現在沖縄県内に居住する県外からの移住者に対して、半構造化面接による聞き取り調査を実施した。面接を実施する上で、心理学的な面接調査のスキルのほかに、沖縄県独自の慣習や言語表現などへの知識が必要とされるため、現在県内に在住する調査員3名(研究者、大学院生を含む)に面接を依頼した。1回の面接時間は、1時間~2時間程度であった。

③ 調査協力者

スノーボール・サンプリング形式で県外出身の沖縄在住者を募り、21歳~66歳の成人26

名(男性20名/女性6名:平均年齢33.46歳, $SD=10.87$)から調査の承諾を得た。沖縄での平均居住年数は6.08年($SD=3.85$)であった。

④調査項目

沖縄移住のきっかけや動機、来沖前・来沖直後・現在の沖縄イメージなどについて尋ねた。なお、時系列に沿った感情状態を把握するため、沖縄移住前後(過去)、現在、将来を横軸にとった感情曲線を描かせ、波形の起伏の大きい箇所のライフ・イベントを中心に聞き取りを行った。

(2) 沖縄移住者の移住動機に関する量的研究

①調査の主目的

研究(1)に引き続き移住動機のエピソードを収集し、(1)の結果を踏まえて類型化を完成させた上で、他の心理的変数(適応状態など)との関連性について分析を行う。

②調査方法

調査項目を作成後、(株)マクロミル社に委託し、Web調査の形式でデータの配布・回収を行った。まずは事前調査によって、沖縄県内在住のアンケートモニターの中から沖縄県外出身者をスクリーニングした後、本調査の項目に回答させる形式を採った。

③調査協力者

県外からの移住者412名(男性201名、女性211名、平均年齢42.7歳($SD=11.1$))から回答を得た。平均居住年数は9.68($SD=9.17$)年であった。

④調査項目

移住動機-「沖縄に移住したきっかけは何ですか(自由記述)」、移住の自発性-「どちらかと言えば自分の意志で決めた」・「どちらかと言えば自分では決めていない」の2者択一、適応-「全般的に、私は沖縄の社会や文化に適応できている」などについて5件法で回答を求めた。

4. 研究成果

(1) 移住者の移住動機に関する探索的研究

①移住前の沖縄イメージ

移住動機を分析する上で、移住先の場所の要因・特徴(この場合、沖縄)にも考慮するため、移住前の沖縄イメージについて聞き取りを行った。以下に「来沖前のイメージはどのようなものでしたか」という質問への回答をまとめた(表1参照)。

肯定的な回答としては、「南国・楽園(4)」、「青い海」などの沖縄の自然について、あるいは「人があたたかい」「のんびりしている」などの沖縄県民について形容した回答がみられた。否定的なものには、「米軍基地」「戦争」「米兵」などの戦争や基地問題に関する回答が主であった。肯定的なイメージは沖縄移住の要因になりやすいと考えられるが、

「自らの目を見て基地問題を理解したい」などの、否定的イメージが移住のきっかけになるケースも複数みられた。

表1: 来沖前の沖縄イメージ

肯定的	中立的	否定的
・南国・楽園(4)	・外国みたい(3)	・米軍基地(5)
・青い海(5)	・田舎、何も無いところ(3)	・戦争
・(気候が)暖かい(5)	・興味はない	・米兵
・観光地(2)	・暑そう	・危ないところ
・文化が豊か(2)		・不条理を被る人たち
・(人が)温かい(3)		・肥満
・のんびり、ゆったり(4)		・(人が)いい加減
・楽しんで生きられる(4)		
・幸せ		
・ちゅらさん(2)		

※ ()内は出現数

②移住動機のパターン

面接調査で得られた26名の感情曲線の波形と聞き取り内容をもとに分類した結果、移住動機には主に「ビジネス・勉強型」「同伴型」「逃避型」「療養・セカンドライフ型」の4パターンがみられることが明らかとなった。図1は、沖縄移住が「自発的-非自発的」、沖縄移住の目的が「具体的-抽象的」の2軸を基準に移住動機パターンを図解化したものである。類型化や軸の基準としては、Furnham & Bochner (1980)の国際移住の類型を参考にした。

たとえば「逃避型」は、沖縄移住を自発的に決めているものの、その目的は「(悪いこと)から逃れるため」と抽象的であると捉えられる。これに対し、「ビジネス・勉強型」は沖縄移住が自発的で、目的も「〇〇を勉強するため」「沖縄で起業するため」などより具体的であると解釈できる。

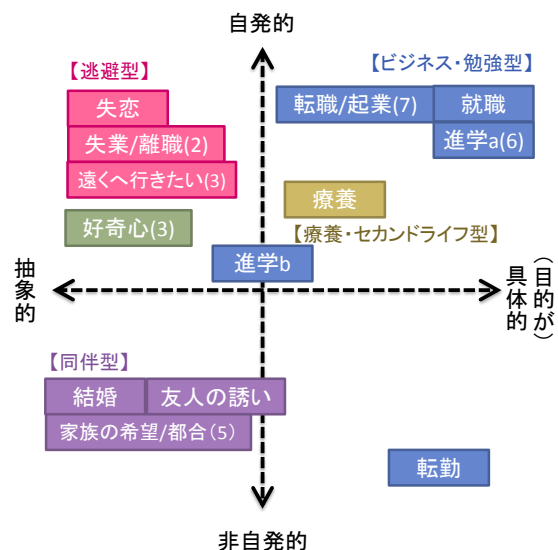


図1: 移住動機の布置図

③個別事例の分析

次に、調査協力者の個別の事例を詳細にみていく。ここでは、2つの典型的事例をとりあげる。

【事例1：ビジネス・勉強型】

A氏(20代女性/单身/会社員/来沖～5ヶ月)
 ……基地問題に関心があり、沖縄で就職することに。沖縄の人はすごく心がきれいなイメージがあった。最初は、何でも親切に教えてくれて、沖縄の人は温かいと思った。就職後は、仕事が楽しかった。ところがある日、職場の人に「友達を作りたいなら、方言をやめたら?」と言われ、泣いて帰る。辞職しようと思った……いったん帰郷し、気にしないように割り切った……だが、その後も仕事で、本土(沖縄で日常的に用いられる語で、沖縄県以外の日本本島を指す。「内地」もほぼ同義)出身という理由で嫌な思いを度々する……よく話す友人は、本土出身の人が多く、地元には、毎月帰りたと思う……最初はずっと沖縄にいるつもりで来たが、最近では帰ろうと思うことが増えた……(図2参照)

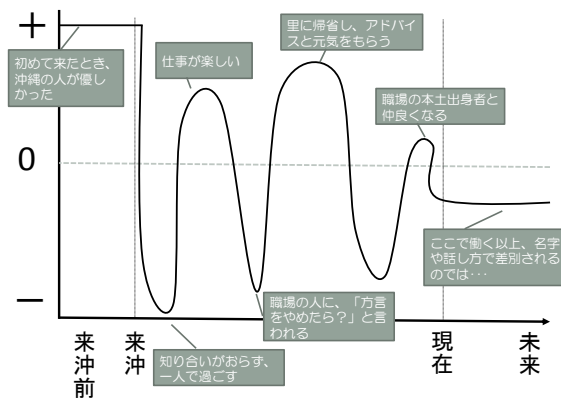


図2: 来沖前後の感情曲線(A氏)

【事例2：逃避型】

B氏(30代男性/配偶者あり/無職・学生/来沖～10年)
 ……失恋後に仕事を辞め、気分転換に来沖。短期間の予定でゲストハウスで働くが、そのまま滞在することに。毎日が新鮮で楽しく、失恋の痛みはすぐに解消された。帰る理由もなく、沖縄で就職……仕事でナイチャーを嫌う客に出会い、苦労を経験……来沖3年目以降、日々の変化は感じなくなる。一方で、沖縄の知り合いとの深いつきあいも増え、馴染んできたと感じる……仕事がきつくて退職し、そろそろ内地に帰ろうと考えたが、ちょうど別の職場に採用され、その間に内地出身・沖縄好きの女性と出会い結婚。幸せなほうではあるが、仕事の内容には興味が持てず、未来に対してぼんやりと不安はある。現在は仕事を辞め、資格取得のため勉強中。もっとウチナーンチュに近づきたい。人間関係は沖縄が中心で、沖縄が自分の拠点。老後までずっと沖縄にいたいと思う……(図3参照)

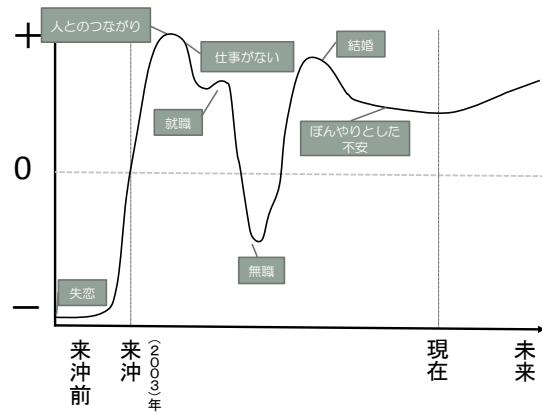


図3: 来沖前後の感情曲線(B氏)

以上のような事例をもとに、移住動機のパターンと適応過程を質的に検討した結果、「ビジネス・勉強型」のように、明確な目的を伴って移住した者ほど感情曲線の激しい起伏がみられた。そして、移住からしばらく後に、理想と現実のギャップから、深刻な不適応状態を経験する傾向があることなどが明らかにされた。これに対し「逃避型」では、来沖前にネガティブな出来事を経験しているため、来沖後にかけて徐々に幸福感が高まる。その後も波はあるものの、来沖前より幸福感が低下することはなく、現在の生活への満足度も比較的高い。すなわち、ネガティブなことから「逃避」し、「リセット」する目的は成功していると言える。ただし、「逃避」したものの沖縄に適応できず、日本本土へ帰ってしまうケースも考えられるため、この傾向は現沖縄居住者に限定される可能性がある。

(2) 移住者の移住動機パターンと適応レベルとの関係性の検討

① 移住動機の種類

(1)の移住動機の種類を裏付けるため、「沖縄に移住したきっかけは何ですか」に対する自由回答データをKJ法による分類手法を用いて質的なカテゴリー化を行った。なお、(1)の結果から、自発的な移住-非自発的な移住を区別して捉える必要があると考えられた。そこで、自発的な移住動機(263コメント)と非自発的な移住動機(149コメント)それぞれについて、2~3名の大学院生が分類作業を行った。

自発的な移住動機を分類した結果、(1)の結果と同様、仕事や進学など「ビジネス・勉強型」、結婚や家族・パートナーの都合など「同伴・随行型」、現状からの逃避の「逃避型」が見いだされた。また、東日本大震災や原発事故からの避難のための移住も存在し、「逃避型」に含められた。このほか、病気の療養や、定年退職後の楽しみとして移住する「療養・セカンドライフ型」、趣味や過去の旅行経験など個人的な趣味や志向から移住する「個人志向型」、さらに暮らしやすさ温暖な気候など、日常生活における環境を重視する「生活環境型」もみられた。一方、非自

発的な移住動機については、「ビジネス・勉強型」、「同伴・随行型」、「逃避型(震災避難として)」の3パターンのみが認められた。非自発的移住は、配偶者や両親の都合などによって沖縄へ引っ越すなどの「同伴・随行型」が43%と大多数であった(図4参照)。

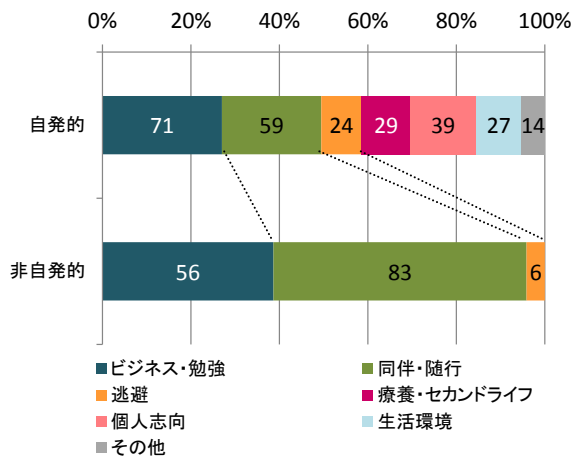


図4: 移住動機の種類・割合
(グラフ上の数字はコメント件数)

② 移住動機のパターンが適応レベルに及ぼす影響

全般的な傾向を探るために、移住動機の自発性(自発的移住/非自発的移住)と適応レベルの違いを検討した。 t 検定の結果、自発的(3.50($SD = .83$))と非自発的(3.24($SD = .89$))では有意差が認められ、自発的移住で適応レベルが高かった($t(410)=2.97, p < .01$) (図5参照)。

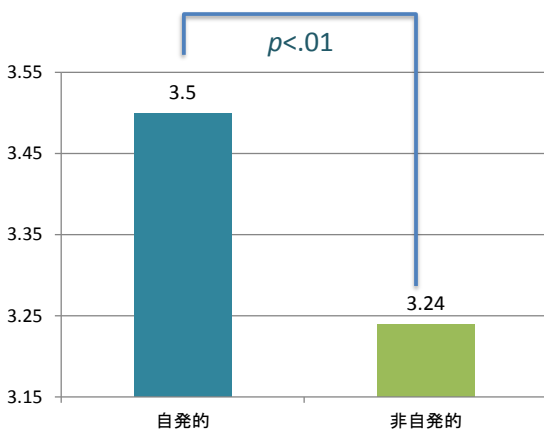


図5: 自発的移住者・非自発的移住者の適応感の平均値

以上の結果より、移動の自発性は移住先での適応レベルに影響することが示された。しかし、自発的移住と非自発的移住では、適応のプロセスや適応に影響する要因が異なる可能性があるため、引き続き詳細な検討が必要である。

<国内外における位置づけとインパクト>

人が移動(移住)するもっとも大きな理由は、経済的理由(より高い所得水準やよりよい雇用機会に獲得)にもとづく生活の向上への期待であると言われる(渡戸, 2010)。例えばそれは、地方から都市への移住であったり、戦前・戦後の日本が貧しい時代における海外移住であったりした。だが、失業率の高さなどを考えると、沖縄への移住は経済的理由とは別の要因に引き起こされる可能性が高い。本研究で見いだされた移住動機のうち、「逃避型」や「個人志向型」、「生活環境型」などが新しいパターンに該当すると考えられる。

近年、このように新しい生活環境を求めて移住する人々は「ライフスタイル移民」(須藤, 2010)「文化移民」「自分探しの移民(若者について)」(渡戸, 2010)などと呼ばれて社会的に論じられることがある。交通の発達によって移住の選択肢が広がった現在、この新しい形の移住は、将来的には移住の中で主要な割合を占めるようになるとも予想される。心理学的にこの種の移住を扱った研究は現状あまり存在しないが、よりよい生活環境を志向して移動する行為には、まさに心理学的な要素が影響していると考えられる。本研究の成果により、ライフスタイル移民の心理学的な素因の解明につながることを期待される。そして、移動によって環境を変化させる行為について検討することは、個人の幸福や適応に関する研究に貢献できると考えられる。

さらに、移住者と地元出身者との異文化間接触を研究し、両者の関係性の向上に応用させることができれば、コミュニティの発展につながる実践的な価値もある。

従来、日本人と移動(移住)は、あまり馴染みのないものであると考えられてきたため、移動する日本人(日本人の移民)に関する研究は乏しいと言わざるを得ない。ライフスタイル移民も含めて、日本人の国内移住・国際移住について異文化間心理学的に検討することは、国内外の移民についての心理学的研究を進展させることにつながるだろう。

<今後の展望>

本研究は移住者の移住動機を探索することに焦点をあてた。今後は、地元出身者の移住者への態度を中心に検討する調査を実施する予定であり、移住者・地元出身者の双方向的な立場から解釈を進める。同時に、沖縄移住と異文化適応に関する経験的データもさらに蓄積していく必要がある。

なお本研究では、移住者として沖縄県に現在住んでいる県外出身者を対象としたため、沖縄に適応できずに本土へ帰ってしまったケースが含まれていないという限界がある。県外移住者のネットワークを頼りに、今後は沖縄-本土のUターン移住者の事例を検討することも重要であろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

- ① 加藤 潤三、前村 奈央佳、沖縄の県外移住者の適応におけるソーシャルキャピタルの影響、人間科学、査読無、31巻、2014、111-143

[学会発表] (計7件)

- ① 前村 奈央佳、加藤 潤三、沖縄移住者の移住動機と適応について、日本心理学会第78回大会、2014年9月10日-12日(発表確定)、同志社大学
- ② 加藤 潤三、前村 奈央佳、県外移住者の適応における社会的ネットワークの影響、日本社会心理学会第55回大会、2014年7月26日(発表確定)、北海道大学
- ③ Naoka Maemura & Junzo Kato, Migration motivations and adjustment to a southern Japanese island: A case study of domestic emigrants to Okinawa, the 28th International Congress of Applied Psychology, 12th July, 2014 (発表確定), Palais des Congres- Paris France.
- ④ Junzo Kato & Naoka Maemura, Effect of social capital on the adjustment of domestic emigrants to Okinawa, the 28th International Congress of Applied Psychology, 12th July, 2014 (発表確定), Palais des Congres- Paris France.
- ⑤ 加藤 潤三、前村 奈央佳、県外移住者の適応に関する諸要因の検討、沖縄心理学会、2014年3月16日、琉球大学
- ⑥ 加藤 潤三、前村 奈央佳、移住者の適応におけるソーシャルキャピタルの影響、九州心理学会、2013年11月16日、琉球大学
- ⑦ 前村 奈央佳、加藤 潤三、沖縄移住者の移住動機と適応過程についての事例研究、日本社会心理学会第54回大会、2013年11月2日、沖縄国際大学

6. 研究組織

(1) 研究代表者

前村 奈央佳 (MAEMURA, Naoka)
関西学院大学・社会学部・准教授
研究者番号：50632238